

〔原著〕

## 中学生における悩みの相談に関する調査

筑波大学人間総合科学研究科：永井 智

筑波大学心理学系：新井邦二郎

An investigation of consulting about concerns among junior high-school students

Satoru Nagai and Kunijiro Aari

### 問題と目的

思春期とは、身体的にも心理的にも大きな変化の起こる時期であり、様々な悩みに直面する時期である。もちろん、多くの者はこれら悩みとの対峙によって、成長してゆく。しかし一方で、中学生の悩みは、様々な健康問題へつながる可能性も指摘されている(伊藤, 1993)。そのため、一人では解決できず、苦痛をもたらし続けてしまうような問題には、何かしらの援助獲得が必要であると考えられる。

石隈・小野瀬(1997)が全国の中学生、高校生対象に行った調査では、中学生、高校生は様々な悩みを抱えていながら、それを誰にも相談しない者が38%も存在したことが報告されている。このことから、悩みを誰にも相談しない中学生が相当数いることがうかがえる。

しかしながら、石隈・小野瀬(1997)の結果のみを受けて、相談行動の促進を唱えることは早計であろう。なぜなら、悩みを誰にも相談しない者の中には、単に誰にも悩みを相談できない者だけではなく、自分自身で積極的に悩みに取り組もうとする者も存在する可能性があるからである。

この「悩みを他者に相談する」という相談行動は、主に社会心理学の領域において援助要請行動の観点から研究の対象とされてきた。援助要請行動の代表的な定義は「個人が問題の解決の必要性があり、もし他者が時間、労力、ある種の資源を費やしてくれるのなら問題が解決、軽減するようなもので、その必要のある個人が

その他者に対して直接的に援助を要請する行動(DePaulo, 1983)」とされるが、これによれば、相談行動は援助要請行動の一形態であるということができる。

そして、援助要請行動のモデルではしばしば、問題を抱えても、それを自分で解決できそうな場合は、援助要請行動がなされないことが示されている(相川, 1989; 高木, 1997)。つまり、悩みを抱えても相談しない者が多いとはいえ、その中には、「そもそも相談意図のない者」と「相談をしたくてもしない者」の2群が混在していると考えられる。

ところで、Larson & Chastain(1990)は「悩み、ネガティブと認知される様な個人的情報を他者に対して積極的に隠蔽する傾向」である自己隠蔽という概念を提唱しており、この自己隠蔽が身体的・心理的症状と関係することを明らかにしている。また、これは単に自己開示によるカタルシスやソーシャル・サポートが得られなかったためではないと報告している。このことから、もしある人が相談したいと思っていながら、相談できないでいるとしたら、それは何らかの苦痛を生じさせる可能性がある。

以上を考えると、悩みを抱えても相談しない者のうち、「そもそも相談意図のない者」に比べ、「相談をしたくてもしない者」の方が、何らかの援助が必要である可能性がある。そのため、この両者は区別される必要があると考えられる。しかしながら、これまでの研究において、「そもそも相談意図のない者」と、「相談をしたくてもしない者」との二者が区別されることはほとん

どなかった。また、両者がどの程度存在するの  
かも明らかにされていない。従って、「そもそも  
相談意図のない者」と、「相談をしたくてもしな  
い者」を区別し、各々がどの程度存在するの  
かを明らかにすることは、今後、中学生の相談行  
動を研究する上で意義があると考えられる。

また、援助要請行動の研究においては、性別  
による差が、重要な要因の一つとされている。  
様々な集団を対象とした研究において、心理的  
問題の援助要請行動は、男性よりも女性の方が  
高いとされている。この傾向は必ずしも一貫し  
ないという指摘もあるが(水野・石隈, 1999),  
少なくとも男性の方が女性よりも援助要請行動  
が高いという報告はほとんど存在しない。

中学生の援助の上で、男子と女子それぞれの  
傾向の差を知ることは、重要であると言える。  
これまでの研究において、友人に対する相談行  
動については、男子よりも女子の方が高いこと  
が明らかになっている(永井・新井, 2005)。し  
かしながら、その他、親や先生、スクールカウ  
ンセラーといった相手への相談行動の性差は明  
らかにされていない。

そこで、本研究では「そもそも相談意図のない  
者」と、「相談をしたくてもしない者」という  
視点から、中学生の悩みと、その相談経験の実  
態を明らかにし、加えてそれらの性差を検討す  
ることを目的とする。また、扱う悩みには、石  
隈・小野瀬(1997)が見出した中学生の抱える  
援助ニーズを用いる。これは、中学生を対象と  
した実際の調査から明らかにされたものであり、  
現実の中学生が抱えやすい援助ニーズを反映し  
ていると考えられる。

## 方 法

**対象** 東京・埼玉・神奈川・千葉・茨城の中  
学校17校の中学生1～3年生, 63クラス, 計  
2075名(一年生18クラス, 男子267名, 女子325  
名, 二年生23クラス, 男子400名, 女子361名,  
三年生22クラス, 男子378名, 女子344名)。な  
お分析に際しては、欠損値の複数あった51名を  
除いた計2024名を分析の対象とした。

**調査時期** 2004年7～10月

**質問紙の構成** 中学生に尋ねる悩みの種類と  
しては、石隈・小野瀬(1997)による中学生に  
おける11の心理・社会的問題の中から、最も中  
学生の悩んだ経験が少ない「委員会活動や班活  
動で悩みがあるとき」を除く10の悩みを用いた。  
しかしながら、10の悩み全てについて、悩んだ  
経験や相談経験を尋ねることは、回答する者に  
とって負担となり、解答が歪む可能性がある。  
そこで本研究では、質問紙Aと質問紙Bという  
2種類の質問紙を用意し、それぞれの質問紙で、  
10ある心理・社会的問題から5つずつ尋ねるこ  
とにした。悩みの種類は、中学生の悩んだ経験  
の高いものからそれぞれの質問紙に振り分けて  
ゆき、質問紙Aでは、「自分の性格や容姿(よう  
し)で気になることがあるとき」「なぜかひどく  
落ち込んだり逃げ出したい気分におそわれたと  
き」「友だちとのつき合いがうまくいかなかった  
り、友だちがいなくて」「学校に行くのがつら  
くなったり、行きたくなかったりしたとき」  
「担任や部活動の先生に対して不満があるとき」  
という5つの悩みを提示した。質問紙Bでは、  
「自分の性格や自分の身体の変化などを知りたい  
とき」「友だちとのつき合いをうまくやれるよ  
うにしたいと思うとき」「自分の性や異性との交際  
のことで悩みがあるとき」「学校あるいは学級に  
なじめないとき」「自分の家庭のことで心配や悩  
みがあるとき」という5つの悩みを提示した。

1. **悩みの経験** 質問紙に応じた5つの悩みを  
順に提示し、「過去一年の間、上のような状況に  
なって、悩んだ経験はありますか?」と言う項  
目で、「4:よくある」「3:ときどきある」  
「2:あまりない」「1:まったくない」の4件  
法で尋ねた。

2. **悩みの相談経験** 悩みの経験で示したそれ  
ぞれの悩みについて、「4:よくある」「3:少  
しある」と回答した悩みそれぞれについて、「そ  
の悩みは誰かに相談しましたか?」と尋ね、「友  
達」「先生」「親」「スクールカウンセラー」それ  
ぞれについて、「相談した」「相談したいと思っ  
たが相談しなかった」「相談しようとは思わな  
かった」のいずれかを選択するよう求めた。

手続き 質問紙Aと質問紙Bを同数用意した上で生徒にランダムに配布し、各クラス単位で、ホームルームの時間に無記名で実施した。分析の対象としたものの内、質問紙Aへの回答者は、995名（男子533名、女子462名）であり、質問紙Bへの回答者は1029名（男子537名、女子492名）であった。

結 果

悩みの経験 まず、各悩みの経験において、「4：よくある」「3：ときどきある」のいずれかに回答した者を悩み経験者とした。そして、各悩みにおける、悩み経験者の割合を算出した（Table 1）。各悩みについて悩み経験者の割合は23.8～59.8%であり、「友達とのつき合いをうまくやれるようにしたいと思うとき」が最も悩み経験者が多く、「学校あるいは学級になじめないとき」が最も悩み経験者が少なかった。

次に、男女差を検討するため、それぞれの悩みにおいて性別(2)×悩みの経験(2)のカイ二乗検定を行った。その結果、「学校あるいは学級になじめないとき」のみ5%水準で、残りの項目は全て1%水準で有意であり、男子よりも女子の方が悩んだ経験を多く報告していた。

悩み経験者の相談経験 悩み経験者において、各悩みについて「相談した」「相談したいと思ったがしなかった」が選択された割合を Table 2

に示す。全体としては、相談相手としてもっとも選ばれていたのは友人であり、相談経験の割合は38.0%であった。また、相談したいと思ったがしなかったという割合も、友人に対するものが14.0%と最も高かった。相談した割合、相談したいと思ったがしなかった割合は、ともに、友達に次いで親が最も高く、続いて、先生、スクールカウンセラーという順に低くなっていった。

また、男女別の割合をそれぞれ Table 3 と Table 4 に、男女それぞれの合計を比較した表を Table 5 に示す。男女いずれも、相談した割合、相談したいと思ったがしなかった割合は友人が最も高く、次いで親、先生、スクールカウンセラーの順であった。

続いて、相談経験の男女差を検討するため、質問紙A、質問紙B、全体のそれぞれについて、各相談相手における性別(2)×相談経験(3)のカイ二乗検定を行った。その結果、質問紙Aにおいては、友達( $\chi^2(2)=57.70 p<.01$ )、親( $\chi^2(2)=43.61 p<.01$ )、先生( $\chi^2(2)=14.25 p<.01$ )において有意な関連が見られた。残差分析の結果、友達、親、先生いずれも「相談した」者は男子よりも女子の方が多く、親と先生においては「相談したいと思ったがしなかった」者が男子よりも女子の方が多かった。また、友達と親において、「相談しなかった」者が、女子よりも男子に多かった。

Table 1 悩みの経験および、悩みの経験者における悩みを相談しなかった者の割合

項目	悩みの経験(%)				悩みを相談しなかった者の割合(%)				
	全体	女子	男子	カイ二乗検定結果	全体	女子	男子	カイ二乗検定結果	
質問紙A	1. 自分の性格や容姿(ようし)で気になることがあるとき	49.4	62.5 <	38.1	58.65 **	55.8	47.0 <	68.3	21.79 **
	2. なぜかひどく落ち込んだり逃げ出したい気分におそわれたとき	47.1	59.0 <	36.8	49.09 **	50.3	44.3 <	58.7	9.43 **
	3. 友だちとのつき合いがうまくいかなかったり、友だちがいないうとき	33.5	47.9 <	21.1	79.90 **	77.5	75.2	81.0	0.95 n.s.
	4. 学校に行くのがつらくなったり、行きたくなくなったりしたとき	35.0	40.4 <	30.5	10.57 **	59.8	50.5 <	70.4	14.09 **
	5. 担任や部活動の先生に対して不満があるとき	50.8	56.1 <	46.1	9.79 **	28.7	20.6 <	37.1	16.73 **
質問紙B	1. 自分の性格や自分の身体の変化などを知りたいとき	41.9	50.7 <	33.9	29.66 **	55.2	49.6 <	63.0	7.58 **
	2. 友だちとのつき合いをうまくやれるようにしたいと思うとき	59.8	69.5 <	51.0	36.23 **	54.8	40.5 <	72.6	63.43 **
	3. 自分の性や異性との交際のことや悩みがあるとき	27.7	33.8 <	22.2	17.37 **	93.1	86.8 <	96.8	3.66 †
	4. 学校あるいは学級になじめないとき	23.8	27.0 <	20.9	5.32 *	48.4	39.4 <	58.9	9.26 **
	5. 自分の家庭のことや心配や悩みがあるとき	31.0	36.5 <	26.1	12.93 **	60.2	56.4	65.0	2.41 n.s.

カイ二乗検定は実数で実施  
†: p<.10 \* : p<.05 \*\* : p<.01

Table 2 悩み経験者における悩みの相談経験と相談相手（全体）

項目	相談	相談相手 (%)			
		友達	親	先生	SC
1. 自分の性格や容姿(ようし)で気になることがあるとき	◎	29.2	22.7	6.3	1.8
	△	14.9	11.5	6.5	2.9
2. なぜかひどく落ち込んだり逃げ出したい気分におそわれたとき	◎	38.7	19.7	6.0	2.1
	△	13.9	15.4	9.2	5.3
質問紙 A 3. 友だちとのつき合いがうまくいかなかったり、友だちがいないとき	◎	37.2	24.6	8.7	1.5
	△	12.3	14.7	12.3	7.2
4. 学校に行くのがつらくなったり、行きたくなくなったりしたとき	◎	20.9	25.3	6.5	1.2
	△	10.3	10.9	7.4	6.2
5. 担任や部活動の先生に対して不満があるとき	◎	63.9	44.2	10.8	2.8
	△	4.6	8.8	7.8	2.0
質問紙A全体	◎	39.3	27.8	7.7	2.0
	△	11.1	12.1	8.5	4.4
1. 自分の性格や自分の身体の変化などを知りたいとき	◎	29.8	21.4	5.2	1.6
	△	16.7	15.8	6.8	4.9
2. 友だちとのつき合いをうまくやれるようにしたいと思うとき	◎	32.8	21.6	5.6	1.8
	△	19.6	13.0	12.7	4.8
質問紙 B 3. 自分の性や異性との交際のことなどで悩みがあるとき	◎	64.8	10.5	1.4	0.7
	△	8.7	10.8	5.6	4.2
4. 学校あるいは学級になじめないとき	◎	36.2	25.9	11.9	2.9
	△	21.4	16.9	13.2	6.6
5. 自分の家庭のことなどで心配や悩みがあるとき	◎	27.7	15.8	6.9	3.2
	△	17.6	13.9	9.7	7.3
質問紙B全体	◎	36.6	19.5	5.9	2.0
	△	17.2	13.9	9.9	5.4
全体	◎	38.0	23.9	6.9	2.0
	△	14.0	13.0	9.1	4.9

◎ : 相談した  
△ : 相談したいと思ったがしなかった

質問紙Bにおいては、友達 ( $\chi^2(2)=182.92 p < .01$ ), 親 ( $\chi^2(2)=10.13 p < .01$ ) において有意な関連が見られた。残差分析の結果、友達、親ともに、「相談した」者は男子よりも女子の方が多く、「相談しなかった」者は、女子よりも男子の方が多かった。

全体としては、友達 ( $\chi^2(2)=195.77 p < .01$ ), 親 ( $\chi^2(2)=44.02 p < .01$ ), 先生 ( $\chi^2(2)=13.58 p < .01$ ) において有意な関連が見られた。残差分析の結果、友達、親、先生いずれも「相談した」者は男子よりも女子に多く、友達と先生に

おいては「相談したいと思ったがしなかった」者が男子よりも女子に多かった。また、友達、親において、「相談しなかった」者が、女子よりも男子に多かった。

このように、友達と親において、「相談した」者は男子よりも女子の方が多く、「相談しなかった」者は、女子よりも男子の方が多という一貫した結果が得られた。また、先生、スクールカウンセラーにおいても、有意ではないものの、「相談した」者は男子よりも女子の方が多く、「相談しなかった」者は、女子よりも男子の方が

Table 3 悩み経験者における悩みの相談経験と相談相手（女子）

項目	相談	相談相手 (%)			
		友達	親	先生	SC
1. 自分の性格や容姿(ようし)で気になることがあるとき	◎	35.8	25.8	6.6	2.4
	△	16.0	12.5	3.5	2.8
2. なぜかひどく落ち込んだり逃げ出したい気分におそわれたとき	◎	44.5	22.1	7.0	3.3
	△	15.1	19.1	9.9	5.9
3. 友だちとのつき合いがうまくいかなかったり、友だちがいないとき	◎	43.4	28.5	9.0	1.4
	△	11.8	16.3	11.8	6.4
4. 学校に行くのがつらくなったり、行きたくなったりしたとき	◎	25.8	33.0	9.3	1.6
	△	11.0	11.5	4.4	5.5
5. 担任や部活動の先生に対して不満があるとき	◎	73.3	53.5	14.7	1.9
	△	4.3	7.8	6.6	1.9
質問紙A全体	◎	45.5	32.4	9.3	2.2
	△	11.8	13.5	7.2	4.3
1. 自分の性格や自分の身体の変化などを知りたいとき	◎	36.7	23.5	4.4	1.6
	△	19.0	15.8	6.0	6.5
2. 友だちとのつき合いをうまくやれるようにしたいと思うとき	◎	46.5	27.4	6.4	1.8
	△	21.9	12.1	13.5	5.9
3. 自分の性や異性との交際のことで悩みがあるとき	◎	77.2	15.0	1.8	0.6
	△	7.8	10.8	4.2	4.2
4. 学校あるいは学級になじめないとき	◎	46.6	27.1	12.8	2.3
	△	23.3	15.8	13.5	8.3
5. 自分の家庭のことで心配や悩みがあるとき	◎	35.8	12.4	7.3	4.5
	△	17.9	11.8	6.1	6.7
質問紙B全体	◎	47.2	22.0	6.2	2.1
	△	18.5	13.1	9.1	6.2
全体	◎	46.3	27.5	7.8	2.1
	△	14.9	13.3	8.1	5.2

◎ : 相談した

△ : 相談したいと思ったがしなかった

多かった。

最後に、各悩みにおいて、悩み経験者のうち、どの相談相手にも「相談した」を選択しなかった者の割合を Table 1 に示す。4 種類の相談相手全てに悩みを相談しなかった割合の最も高い悩みは「自分の性や異性との交際のことで悩みがあるとき」であり、割合の最も低い悩みは「担任や部活動の先生に対して不満があるとき」であった。男女差を検討するため、それぞれの悩みにおいて性別(2)×相談の有無(2)のカイ二乗検定を行った。その結果、10項目中8項目

が有意であり、全て女子よりも男子の方が、各相談相手全てに悩みを相談しない割合が高かった。

## 考 察

悩みの相談経験 まず、実際の相談経験を尋ねた結果では、中学生が最も悩みを相談していたのは友達であり、その割合は38%であった。また、友達の次に相談相手として多く選択されたものは親であり、次いで先生、スクールカウ

Table 4 悩み経験者における悩みの相談経験と相談相手 (男子)

項目	相談	相談相手 (%)			
		友達	親	先生	SC
1. 自分の性格や容姿(ようし)で気になることがあるとき	◎	19.8	18.3	5.9	1.0
	△	13.4	9.9	10.9	3.0
2. なぜかひどく落ち込んだり逃げ出したい気分におそわれたとき	◎	30.6	16.3	4.6	0.5
	△	12.2	10.2	8.2	4.6
3. 友だちとのつき合いがうまくいかなかったり、友だちがいないとき	◎	25.0	17.0	8.0	1.8
	△	13.4	11.6	13.4	8.9
4. 学校に行くのがつらくなったり、行きたくなくなったりしたとき	◎	15.2	16.5	3.2	0.6
	△	9.5	10.1	10.8	7.0
5. 担任や部活動の先生に対して不満があるとき	◎	53.8	34.2	6.7	3.8
	△	5.0	10.0	9.2	2.1
質問紙A全体	◎	30.9	21.6	5.6	1.7
	△	10.2	10.2	10.1	4.5
1. 自分の性格や自分の身体の変化などを知りたいとき	◎	20.2	18.5	6.2	1.7
	△	13.5	15.7	7.9	2.8
2. 友だちとのつき合いをうまくやれるようにしたいと思うとき	◎	15.5	14.4	4.4	1.9
	△	16.6	14.1	11.9	3.3
3. 自分の性や異性との交際のことで悩みがあるとき	◎	47.5	4.2	0.8	0.8
	△	10.0	10.9	7.6	4.2
4. 学校あるいは学級になじめないとき	◎	23.6	24.5	10.9	3.6
	△	19.1	18.2	12.7	4.5
5. 自分の家庭のことで心配や悩みがあるとき	◎	17.3	20.1	6.5	1.4
	△	17.3	16.5	14.4	7.9
質問紙B全体	◎	22.6	16.2	5.5	1.8
	△	15.4	15.0	10.9	4.3
全体	◎	27.0	19.0	5.6	1.7
	△	12.7	12.5	10.5	4.4

◎ :相談した  
△ :相談したいと思ったがしなかった

ンセラーの順であった。これは石隈・小野瀬(1997)とはほぼ同様の結果であり、このように、各相談相手の中で、友人は最も好まれている援助資源であると考えられる。しかし一方で、悩みを抱え、それを友達に相談したいと思ったがしなかったケースの割合は、女子で17%、男子で10%であり、全体では14%であった。このように、友人に悩みを相談したいと思っても相談しないという経験をした者についても、相当数存在することが明らかになった。このことから、「そもそも相談意図のない者」と「相談をしたく

てもしない者」との区別は、意味のあることであると思われる。従って今後、中学生の相談行動研究において、この両者の区別は重要であると考えられる。

悩みの経験とその相談における性差 悩みの経験とその相談の両方において性差が見られた。すなわち、女子の方が男子よりも過去一年間の悩みが多いことが示された。悩みの相談経験については、親と友達において、男子の方が相談しなかった割合が高く、女子の方が相談した割合が高かった。また、悩みを誰にも相談しない

Table 5 悩み経験者における悩みの相談経験の性差

	相談	相談経験 (%)							
		友達		親		先生		SC	
		女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
質問紙A	◎	45.5 ▲ **	30.9 ▽ **	32.4 ▲ **	21.6 ▽ **	9.3 ▲ **	5.6 ▽ **	2.2	1.7
	△	11.8	10.2	13.5 ▲ *	10.2 ▽ *	7.2 ▽ *	10.1 ▲ *	4.3	4.5
	×	42.7 ▽ **	58.8 ▲ **	54.1 ▽ **	68.2 ▲ **	83.5	84.3	93.4	93.8
	$\chi^2$	56.70 **		43.61 **		14.25 **		0.88 n.s.	
質問紙B	◎	47.2 ▲ **	22.6 ▽ **	22.0 ▲ **	16.2 ▽ **	6.2	5.5	2.1	1.8
	△	18.5	15.4	13.1	15.0	9.1	10.9	6.2	4.3
	×	34.2 ▽ **	62.0 ▲ **	64.9 ▽ †	68.9 ▲ †	84.8	83.6	91.7	93.9
	$\chi^2$	182.92 **		10.13 **		1.99 n.s.		3.08 n.s.	
全体	◎	46.3 ▲ **	27.0 ▽ **	27.5 ▲ **	19.0 ▽ **	7.8 ▲ **	5.6 ▽ **	2.1	1.7
	△	14.9 ▲ *	12.7 ▽ *	13.3	12.5	8.1 ▽ **	10.5 ▲ **	5.2	4.4
	×	38.7 ▽ **	60.3 ▲ **	59.1 ▽ **	68.5 ▲ **	84.1	83.9	92.6	93.9
	$\chi^2$	195.77 **		44.02 **		13.58 **		2.28 n.s.	

◎ : 相談した

△ : 相談したいと思ったがしなかった

× : 相談しなかった

▲ : 有意に多い

▽ : 有意に少ない

カイ二乗検定は実数で実施

† : p&lt;0.10 \* : p&lt;0.05 \*\* : p&lt;0.01

割合は、男子の方が女子よりも高かった。つまり、女子の方が多く悩みを経験し、同時に多く相談をしており、男子の方は悩みの経験が少なく、実際に悩みを抱えたとしても、あまり相談を行わないということが明らかになった。

このように、多くの研究において示された援助要請行動の性差は、わが国の中学生においても示された。このことは通常、性役割規範などによって説明されている。すなわち、援助を要請することは、一般に女性の性役割規範に依拠していると考えられる(山口・西川, 1991)。一方、男性は社会生活において非依存的であるべきという性役割規範があるとされており(山口・西川, 1991)、援助要請行動は、この性役割規範に反するものである。同様に、悩みの経験が女子において高いことも、性役割との関連で考えることは可能である。すなわち、問題を他者に表明する行為は、独立独行、体力的な強さ、感情の統制などの男性性に反する(Addis & Mahalik, 2003)。そのため、男子の方が、悩みの経験が少なかったと考えることができる。

しかし、ここで、本研究で扱った悩みの経験が、自己報告のものであることを考慮する必要がある。すなわち、悩みの経験の性差が、性役

割に基づいた問題の表明の差を反映しているならば、真に悩みの経験に性差があるかどうかは明らかにできない。また、日本の中学生における相談行動と悩みの経験の性差が、性役割に由来するものであるかは、現時点では断定できない。これらの点については、今後詳細に検討してゆく必要がある。

**研究と実践への展望** 中学生において、悩みの相談相手は、友人が最も多く、スクールカウンセラーへの相談はわずかであった。しかしながら、約5%のケースにおいて、スクールカウンセラーに相談したいがしなかったことが明らかになった。つまり、専門的な援助を必要としているながら、援助を獲得できない中学生が、わずかながら存在したということである。これまで、カウンセラーなどの専門家に対する援助要請行動は、多くの研究がなされてきた。しかし、それらは大学生、あるいは成人による援助要請行動を対象と研究がほとんどであり、中学生のスクールカウンセラーに対する援助要請行動については、あまり研究されてきていない。そのため、これまでの専門家への援助要請行動の研究によって得られた知見をもとに、今後中学生のスクールカウンセラーに対する援助要請行動

の研究を行ってゆく必要があると考えられる。

加えて、男女の傾向を比較した結果、女子では、悩みを抱えることが多いが、そのことを相談することも多いことが明らかになった。しかし男子では、女子に比べて悩みを抱える割合が少ないが、逆に一度悩みを抱えた場合、援助を求めることが少ないことが明らかになった。そのため、悩みを抱えた男子は、女子に比べて援助を受けづらい状況にあると考えられる。従って、中学校において、男子も援助を受けやすくなるような取り組みを考える必要がある。

また、「自分の性や異性との交際のことで悩みがあるとき」については、ほとんどの中学生が誰にも相談しないことが明らかになった。山縣(2001)が報告する厚生労働省の国民健康運動計画において、10代の性感染症や妊娠中絶は主要なテーマの一つとされている。そのため、性の問題について悩み、それを誰にも相談できない中学生には、何かしらの援助が必要であろう。例えば、中出(2004)や佐々木(2003)は、思春期の学生の援助としてピア・サポート(ピア・カウンセリング)活動を行っている。これは、トレーニングを受けた高校生や大学生が、地域の中学生や高校生に対し、性に関する情報を伝える講座を開いたり、相談に乗ったりするという活動である。このように、中学生にとって身近な年齢の者を、サポート資源として提供する活動は、性の問題のように他人には話づらい問題の援助において有効である可能性がある。

最後に、本研究における留意点、検討点について述べる。まず、本研究結果の一般化可能性の問題がある。本研究での調査対象は、悩みの経験者の割合、また、それを誰にも相談しない者の割合などが、石隈・小野瀬(1997)の結果よりも高かった。これには石隈・小野瀬(1997)の調査が全国の中学生を対象としたのに対し、本研究では関東圏内、比較的首都圏近郊の中学校を対象としていることなどが影響している可能性がある。そのため、本研究の結果をそのまま日本の中学生全体に一般化することは問題があると考えられる。また、本研究の調査内容は、

石隈・小野瀬(1997)の調査内容と若干異なっていることも注意が必要である。例えば石隈・小野瀬(1997)の調査では、相談相手として、友達、先生、親、スクールカウンセラーだけではなく、兄弟や塾の先生、その他の専門機関なども含まれている。そのため、本研究の結果を、石隈・小野瀬(1997)の結果とそのまま比較することはできないと考えられる。

さらに、本研究では質問紙Aと質問紙Bという2種類の質問紙を用いている。そのため、質問紙Aでは先生への相談経験の性差が見られたのに対し、質問紙Bでは性差が見られなかったように、両質問紙の間で結果に若干の違いがある。今後、別の方法での調査や追試などを行い、これらの結果を確認していく必要がある。

今後、これらの検討課題に加え、「相談する意図のない者」と「相談をしたくてもしない者」を区別する要因の検討や、適応との関連などを行う必要があると考えられる。

#### 引用文献

- Addis, M. E., & Mahalik, J. R. 2003 Men, masculinity, and the contexts of help seeking. *American Psychologist*, **58**, 5-14.
- 相川 充 1989 援助行動 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編) 個人から他者へ 社会心理学パースペクティブ1 誠信書房 Pp. 291-311.
- DePaulo, B. M. 1983 Perspectives on help-seeking. In B. M. DePaulo, A. Nadler, & J. D. Fisher (Eds.), *New directions in helping. Vol. 2 Help-seeking* New York: Academic Press. Pp. 3-12.
- 石隈利紀・小野瀬雅人 1997 スクールカウンセラーに求められる役割に関する学校心理学的研究—子ども・教師・保護者を対象としたニーズ調査より 文部省科学研究費補助金(基盤研究<c><2>) 研究成果報告書(課題番号06610095)
- 伊藤武樹 1993 悩みとその対処行動が中学生の健康レベルに及ぼす影響 学校保健研究,



35, 413-424.

Larson, D. G. & Chastain, R. L. 1990 Self-concealment: conceptualization, measurement, and health implications. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **9**, 439-455.

水野治久・石隈利紀 1999 被援助志向性,被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, **47**, 530-539.

永井 智・新井邦二郎 2005 中学生用友人に対する相談行動尺度の作成 筑波大学心理学研究, **30**, 73-80.

中出佳操 2003 大学生によるピア・サポート活動とその意義 人間福祉研究, **6**, 85-99.

佐々木愛子 2003 活動レポート栃木県における思春期保健「新」対策—「ピアカウンセリング」実施中— 公衆衛生, **67**, 769-772.

高木 修 1997 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, **29**, 1-21.

山縣然太郎 2001 「健やか親子21」が目指すもの 「健やか親子21」公式ホームページ—母子保健の2010年までの国民運動計画— <<http://rhino.yamanashi-med.ac.jp/sukoyaka/abstract.html>> (2005年10月31日)

山口智子・西川正行 1991 援助要請行動に及ぼす援助者の性, 要請者の性, 対人魅力, 及び自尊心の影響について 大阪教育大学紀要第IV部門, **40**, 21-28.